

それらの絵図の過半は、興福寺の子院を描いた指図です。寛政3年(1791年)に各子院の指図を一括して作成しているようです。境内や建物の輪郭を描いた、図としては簡略なものですが、面積・長さなどの書き込みがあり、当時の各子院の敷地・建物の状況を知ることができます。

明治維新までは、興福寺の寺域は現在よりもはるかに広く、現在の裁判所・県庁・文化会館・美術館・国立博物館・奈良ホテルやその周辺は、すべて興福寺の寺域だったのです。しかし興福寺はそのように大きな力を持っていたがために、明治維新の廃仏毀釈の際には、寺の存続さえ危ぶまれる危機に見舞われます。その後関係者の努力によって、また寺勢を盛り返していることは周知の通りですが、興福寺旧境内地の景観が、昔と今とはすっかり変化してしまっていることは事実なのです。

近世以前の興福寺は、広大な寺域の中に、100あまりの子院が所狭しと立ち並んでいました。それらのうち、興福寺の中心伽藍や、一乗院・大乘院などの主要院家については研究も進んでいますが、以外の中の子院については、よく分からない点が多いのです。今回の絵図類からは、それらの子院1つ1つの状況を詳しく知ることができます。まだ調査途中で、私たちも詳細を把握しきれてはいませんが、近世興福寺全体の景観を復原する上での、基本資料になるのではないかと思い、日々はりきって調査にいそしんでいるところです。(文化遺産研究部)

▲ 興福寺所蔵絵図の調査

文化遺産研究部歴史研究室では現在、興福寺のご厚意により、興福寺所蔵の140点におよぶ絵図類を調査しています。1点1点について、ラベルを貼り、基本的な書誌事項を調書にとり、写真を撮影する作業を順次進めているところです。



興福寺所蔵絵図の調査風景